

各 関 係 機 関 団 体 の 長 }
各 病 害 虫 防 除 員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病害虫防除所)

令和2年度病害虫発生予報第6号(9月)について

このことについて、病害虫発生予報第6号を発表したので送付します。

予報第6号

ヨトウ類の発生動向にご注意を!

8月の予察調査で、イチゴ苗や大豆等でハスモンヨトウやオオタバコガの寄生、新展開葉の食害痕が**多くのほ場で確認されました。**

向こう1カ月の気象予報では、平年と比べて気温が高いとされており、今後さらにヨトウ類の増加が予想されます。

ヨトウ類は中老齢幼虫になると防除が困難になるので、早期発見に努め適切に防除しましょう。



予察調査で捕獲したハスモンヨトウの幼虫

<予想される向こう1カ月の天候(令和2年8月29日~令和2年9月28日)>

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1カ月の平均気温は高く、降水量と日照時間はほぼ平年並の見込みです。

向こう1カ月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並10 高80% 高い 見込み	少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み	少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み

(福岡管区气象台 令和2年8月27日発表抜粋)

9月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	9月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病	やや多	並	並
	紋枯病	やや多	やや多	やや多
	トビイロウンカ	多	多	多
	斑点米カメムシ類	やや少	並	並
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	やや多	多
	吸夷性カメムシ類	やや多	多	やや多
カンキツ	黒点病	並	並	並
	ミカンハダニ	やや少	並	並
カキ	炭疽病	やや少	やや少	並
	フジコナカイガラムシ	並	並	並
	ハマキムシ類	並	並	並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	多	—※1	少
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	やや少	並	並
	ハダニ類	やや少	並	やや多
	ハスモンヨトウ	多	多	多
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	やや多	やや多
	オオタバコガ	並	やや多	多
	コナジラミ類	並※2	—※2	並
茶	炭疽病	多	やや多	やや多
	もち病	並	並	並
	カンザワハダニ	並	並	並
	チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少	少
	チャノホソガ	やや少	やや少	並
	チャノキイロアザミウマ	やや多	やや多	多
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	並
	チャトゲコナジラミ	やや多	やや多	やや多

注 1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

※1 果樹共通・チャバネアオカメムシの発生量は年次変動が大きいため、（現況）は前年比で示しています。また、（予報）の平年比は—としています。

※2 野菜共通・コナジラミ類の発生量（現況、予報）平年比の根拠である黄色粘着板によるトラップ調査を2018年から実施しているため平年値がないため前年比で示しています。

注 2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：水稲（普通期）】

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

（葉いもち）発病株率 13.9%

（平年 9.6%、前年 11.6%）

発生ほ場率 54.3%

（平年 46.0%、前年 54.3%）

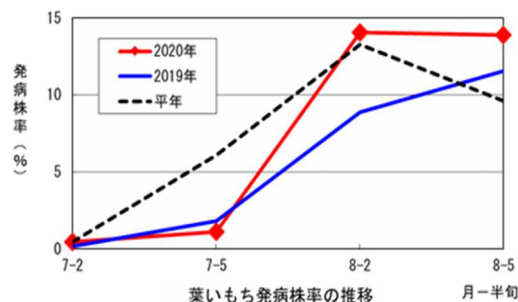
イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている（-）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので使用基準を確認する。

イ 使用農薬は「令和2年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

エ 農薬の使用および散布等にあたっては、P13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

発病株率 4.8%（平年 2.1%、前年 3.4%）

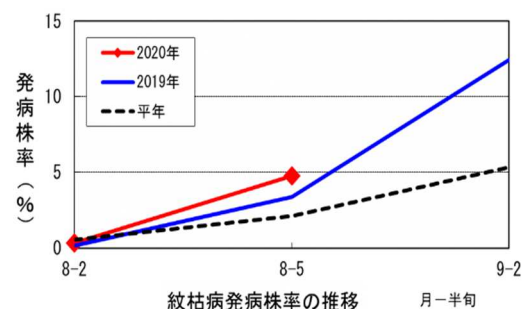
発生ほ場率 26.1%（平年 20.0%、前年 17.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。

イ 農薬によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。



3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。
10株当たり払い落とし成幼虫数 194.8頭（平年 12.3頭、前年 59.5頭）

発生ほ場率 89.1%（平年 47.3%、前年 87.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 詳細は警報第1号（8月7日発表）を参照する。

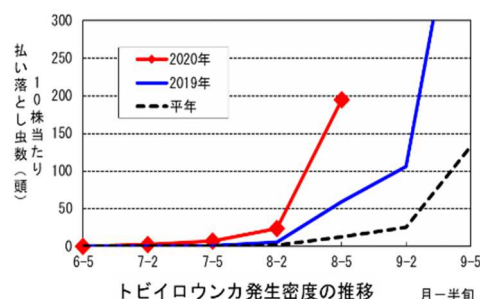
イ 本種は世代を経るごとに急激に増加するので、ほ場での発生状況を必ず確認し、要防除水準を超えたほ場では防除を実施する。

<要防除水準>

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上

飛来後第3世代：100株当たり 1,000頭以上

ウ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう丁寧に散布する。また、収穫前日数に注意する。



4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 県下5か所の予察灯における5月1半旬～8月4半旬の誘殺虫数は、主要3種カメムシは平年並、ミナミアオカメムシは平年より多、アカスジカスミカメは平年よりやや少なかった(±)。

- ・主要3種カメムシ<クモリカメムシ、ホリカメムシ、シラホカメムシ>
41頭(平年62頭、前年78頭)
- ・ミナミアオカメムシ
271頭(平年148頭、前年227頭)
- ・アカスジカスミカメ
471頭(平年1,341頭、前年515頭)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー～±)。

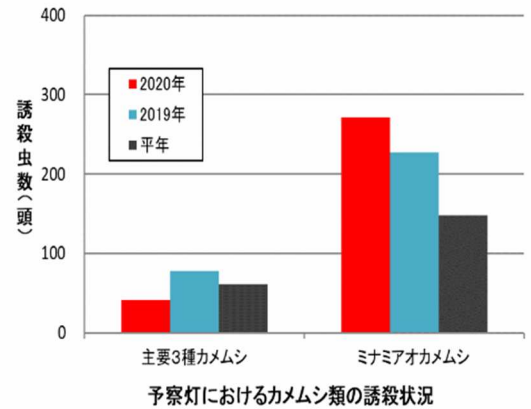
- ・主要3種カメムシ(クモリカメムシ、ホリカメムシ、シラホカメムシ)
20回すくい取り虫数0.6頭(平年0.8頭、前年0.3頭)
発生ほ場率26.1%(平年20.3%、前年10.9%)
- ・ミナミアオカメムシ
20回すくい取り虫数0.02頭(平年0.05頭、前年0.2頭)
発生ほ場率2.2%(平年2.7%、前年2.2%)
- ・アカスジカスミカメ
20回すくい取り虫数0.04頭(平年0.9頭、前年0.04頭)
発生ほ場率2.2%(平年19.1%、前年4.3%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

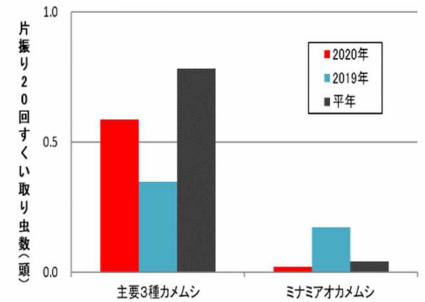
ア 防除時期は穂揃い7～10日後であるが、発生状況には充分留意し、発生が多い場合は農薬安全使用基準(使用時期、使用回数)を遵守し、薬剤防除を行う。

イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。



予察灯におけるカメムシ類の誘殺状況

(5月1半旬～8月4半旬)



ほ場におけるカメムシ類の発生密度(8月5半旬)

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、100株当たりの白変葉発生株数は平年より多かった(+)

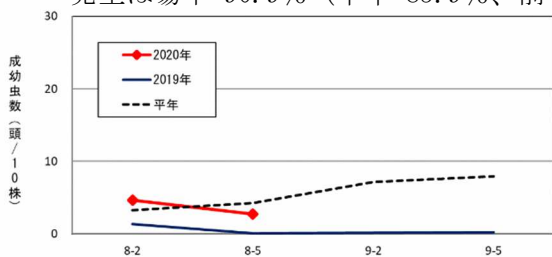
100株当たりの白変葉発生株数2.0株(平年1.2株、前年0.2株)

発生ほ場率88.9%(平年38.6%、前年27.3%)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)

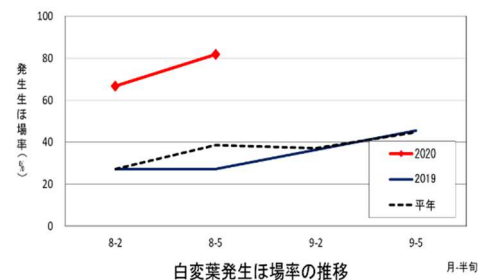
10株当たり幼虫数2.8頭(平年4.3頭、前年0.1頭)

発生ほ場率90.9%(平年85.9%、前年18.2%)



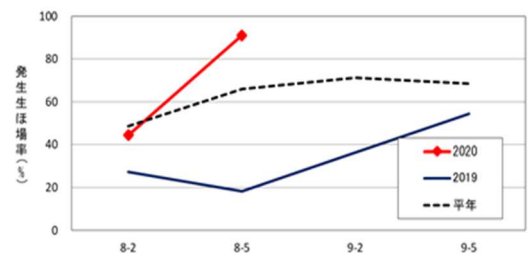
ハスモンヨトウ幼虫発生密度の推移

月・半旬



白変葉発生ほ場率の推移

月・半旬



ハスモンヨトウ幼虫発生ほ場率の推移

月・半旬

ウ 8月1半旬～8月5半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年よりやや少なかった（－～±）。

筑紫野市 732頭（平年 507頭、前年 283頭）

筑後市 359頭（H25～R1年の7か年平均 961頭、前年 267頭）

行橋市 44頭（平年 375頭、前年 110頭）

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉の食害による減収量が大きい時期は開花期前後（8月下旬～9月上旬）である。

イ この時期に分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけ次第除去するとともに、薬剤防除を実施する。

ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より多・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県下5か所の予察灯における5月1半旬～8月4半旬の誘殺虫数は平年より多かった（+）。

271頭（平年 148頭、前年 227頭）

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ

10株当たり虫数 0頭（平年 0.0頭、前年 0頭）

発生ほ場率 0%（平年 0.7%、前年 0%）

・イチモンジカメムシ

10株当たり虫数 0頭（平年 0.0頭、前年 0.2頭）

発生ほ場率 27.3%（平年 5.7%、前年 27.3%）

・ホソヘリカメムシ

10株当たり虫数 0.0頭（平年 0.0頭、前年 0頭）

発生ほ場率 0%（平年 3.6%、前年 0%）

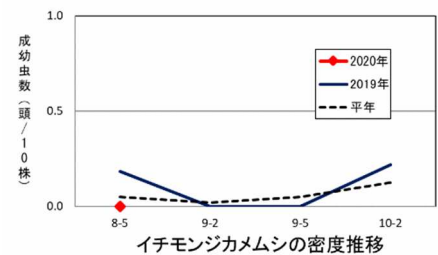
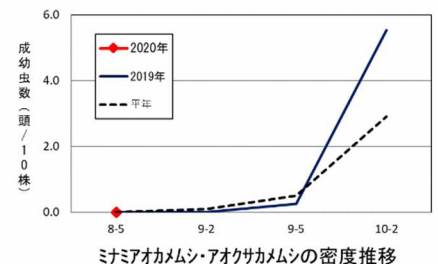
ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は9月中～下旬の開花期後30日前後であるが、多発生の場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

イ カメムシ類は収穫時まで子実被害が続くため、発生初期の防除が重要である。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。



【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病果率 0.6%（平年 1.7%、前年 0.5%）

発生ほ場率 27.3%（平年 38.5%、前年 36.4%）

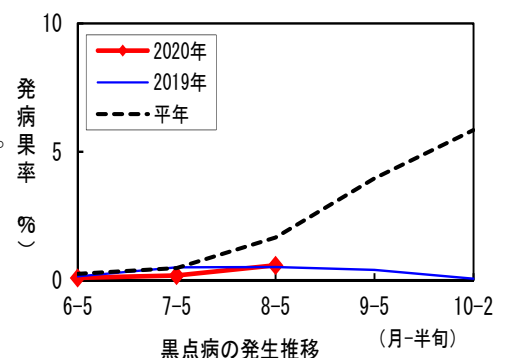
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発生葉率 2.5%（平年 10.1%、前年 9.7%）

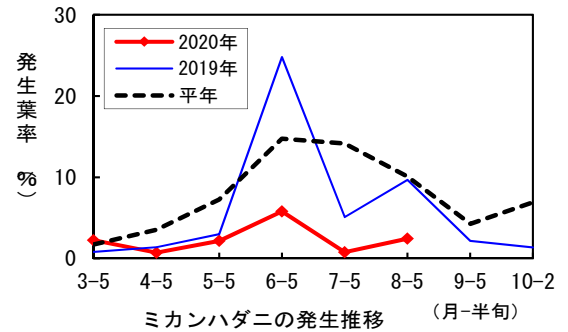
発生ほ場率 45.5%（平年 56.3%、前年 27.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病枝率 0%（平年 0.2%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 7.1%、前年 0%）

発病果率 0%（平年 0.2%、前年 0%）

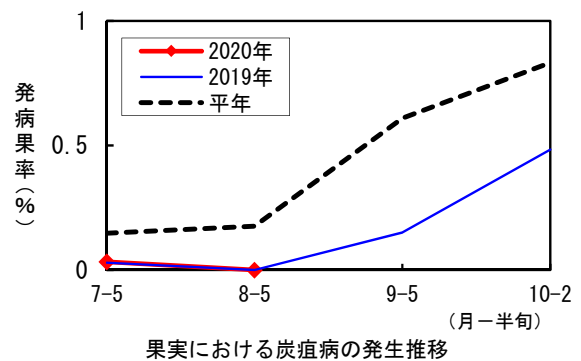
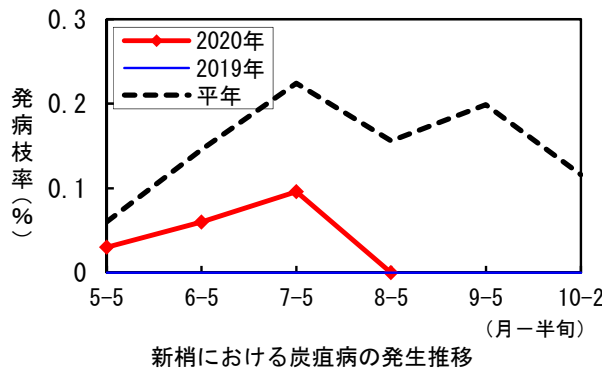
発生ほ場率 0%（平年 13.4%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

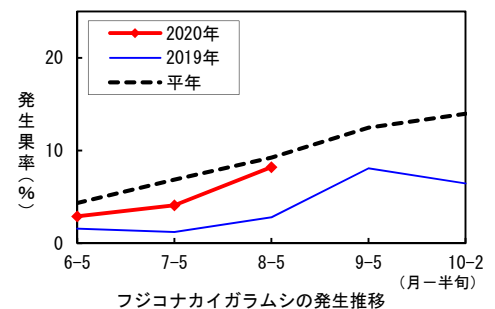
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発生果率 8.2%（平年 9.2%、前年 2.8%）

発生ほ場率 63.6%（平年 82.7%、前年 63.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。
- イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているため、混み合った枝を整理するとともに、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。

3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生果率 0.3% (平年 0.5%、前年 0%)

発生ほ場率 27.3% (平年 33.8%、前年 0%)

イ 第2～3世代と考えられる7月1日半旬～8月5日半旬のフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、平年並であった(±)。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 224頭 (平年 434頭、前年 627頭)

<八女市> 509頭 (平年 434頭、前年 543頭)

：チャハマキ

<うきは市> 9頭 (平年 7頭、前年 3頭)

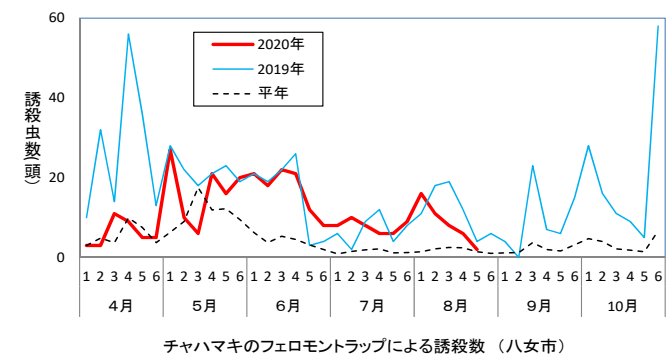
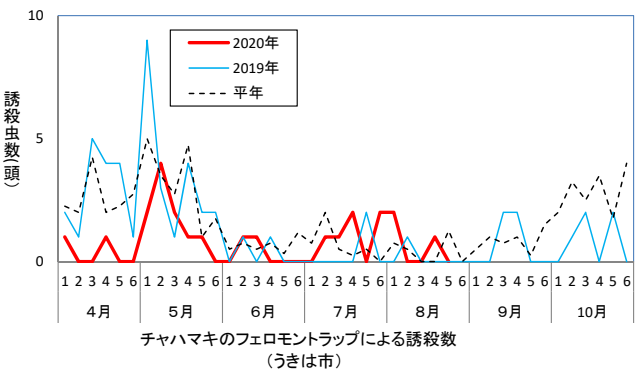
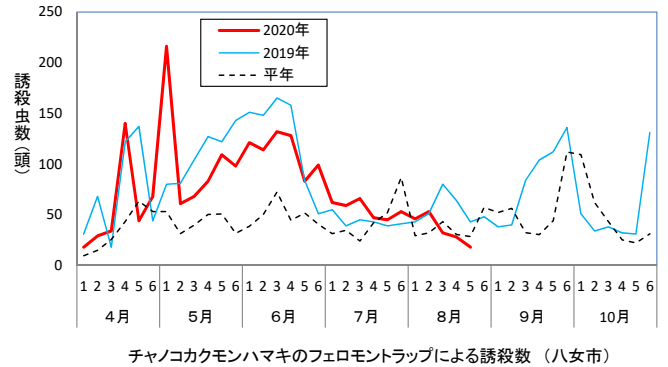
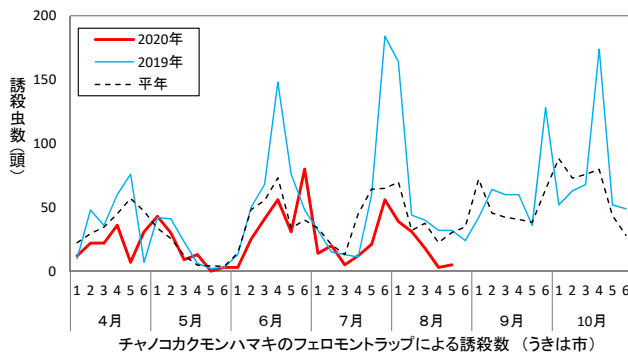
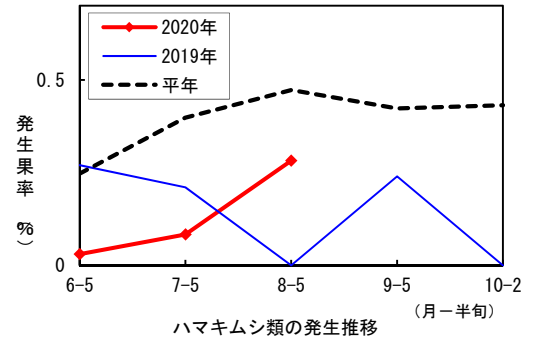
<八女市> 90頭 (平年 19頭、前年 105頭)

*うきは市の平年値は2016～19年の平均

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いため、各態の虫が混発している。発生が多い園では成虫の発生時期と量に注意し、発蛾最盛期7～10日後の若齢幼虫期防除を徹底する。
- イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



【果樹共通】

1 チャバネアオカメムシ

(1) 予報の内容

発生量：前年より少

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの主要な餌であるヒノキ球果着生量※は「少 (2.0)」で、前年「中 (3.8)」より少ない (-)

※) ヒノキ球果着生量 (約 30 地点、5月5半旬～6月2半旬調査) はヒノキ球果の豊凶基準に基づき、極少を1～極多を7として、全体の平均値を算出

イ 4月1半旬～8月3半旬の予察灯6ヶ所の誘殺成虫数及び、フェロモントラップ2ヶ所の誘殺成虫数は、前年より多かった (+)。

8月1半旬～4半旬までの予察灯6ヶ所の誘殺成虫数及び、フェロモントラップ2ヶ所の誘殺成虫数は、前年より多かった (+)。

< 8月1半旬～4半旬の誘殺数 >

予察灯平均 : 552頭 (前年 88頭、2018年 630頭)

フェロモントラップ平均 : 3,128頭 (前年 0頭、2018年 105頭)

< 4月1半旬～8月3半旬誘殺数 >

予察灯平均 : 3,507頭 (前年 152頭、2018年 1,860頭)

フェロモントラップ平均 : 5,179頭 (前年 38頭、2018年 2,633頭)

ウ 8月5半旬の11地点のヒノキ球果ビーティングによる捕獲成幼虫数は、前年より少なかった (-)。

1地点当たりの平均捕獲成幼虫数 : 3.7頭 (前年 6.4頭、2018年 5.0頭)

成虫比 : 62.4% (前年 44.4%、2018年 88.2%)

エ 8月5半旬の11地点のヒノキ球果口針鞘数は、前年より多く、一部地域ではヒノキからの離脱目安の25本を超えたところもある (±～+)。

1地点当たりの1球果口針鞘数 : 3.6～31.6本、平均11.5本

(前年 平均6.5本、2018年 平均22.6本)

オ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている (±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園への来時期は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、多飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ 今後の発生状況等については、病害虫防除所ホームページを参照する。

< <http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html> >

【野菜：冬春イチゴ (育苗期)】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった (-～±)。

発病株率 0.1%

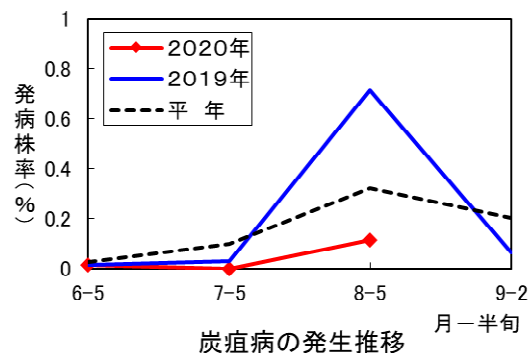
(平年 0.3%、前年 0.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている (±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場をこまめに見回り、発病株や周辺株を速やかに除去・処分し、発病の拡大防止に努める。

イ 育苗床の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空け



て風通しをよくする。

ウ 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後に治療できる薬剤はないことから、感染を防ぐため、定期的な予防散布を徹底する。
なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション防除を行う。

オ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を選抜する。また、入庫前のかん水は過度にならないようにし、入庫時には苗を詰めすぎないように注意する。

カ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生株率 5.8%（平年 9.3%、前年 5.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

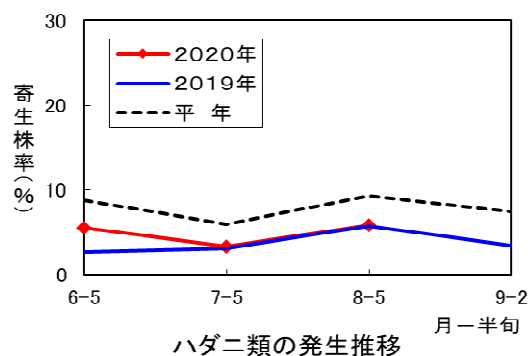
ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ぼにハダニ類を持ち込まないようにする。

オ 抵抗性がつきやすいので、気門封鎖剤も利用し、同一系統薬剤の連用は避ける。また、葉裏に薬液が十分付着するよう、摘葉後に防除を行う。



ハダニ類の発生推移

3 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

寄生株率 1.2%（平年 0.2%、前年 0.3%）

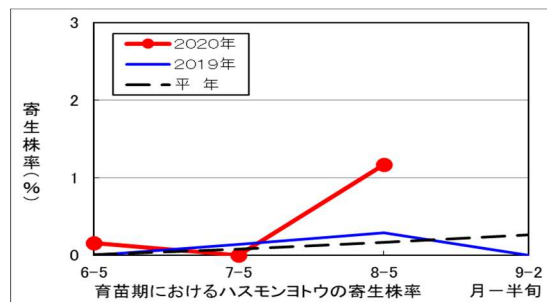
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉をみつけ次第、除去・処分する。

ウ 中老齢幼虫になると薬剤の防除効果が低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。



育苗期におけるハスモンヨトウの寄生株率

【野菜共通】

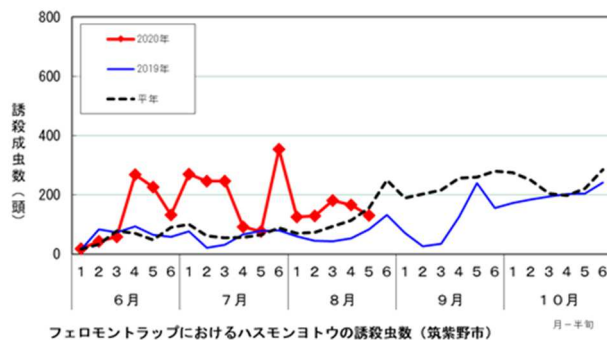
1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は平年並であった（±）。



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数 (筑紫野市)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 地域によって発生量に差があるため、発生を確認したら直ちに防除を行う。

イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。

ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。(以下の害虫についても同様) <<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

2 オオタバコガ

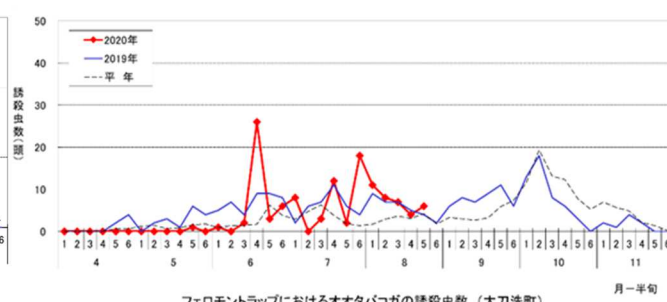
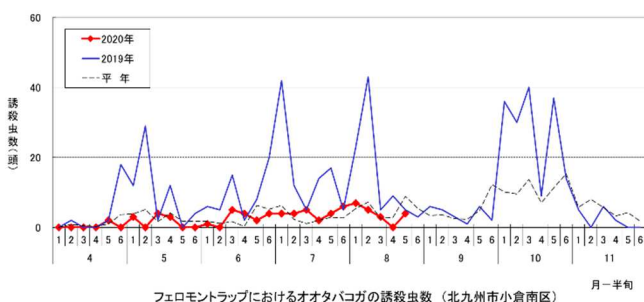
(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は平年並であった(±)。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 地域によって発生量に差があるため、発生を確認したら直ちに防除を行う。

イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。

3 コナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は前年並であった(±)。

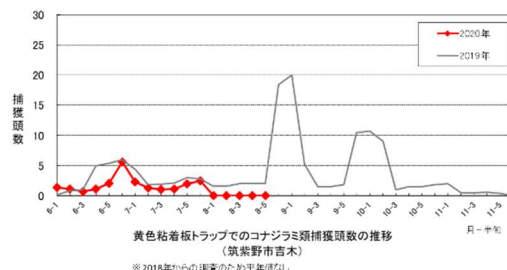
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 早期発見に努め、初期発生からの薬剤防除を徹底する。

イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

ウ 「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。



※2018年からの調査のため平年値なし

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

発病葉数 5.1葉 (平年 1.7葉、前年 3.6葉)

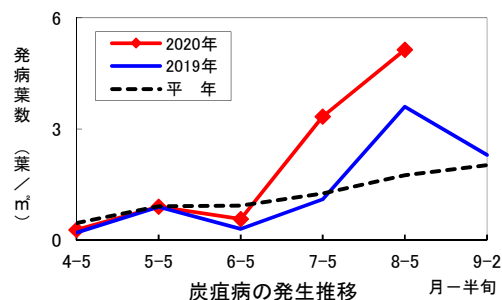
発病ほ場率 100% (平年 33.9%、前年 60.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 秋芽での発生に注意し、4~5葉期の防除を行う。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する。



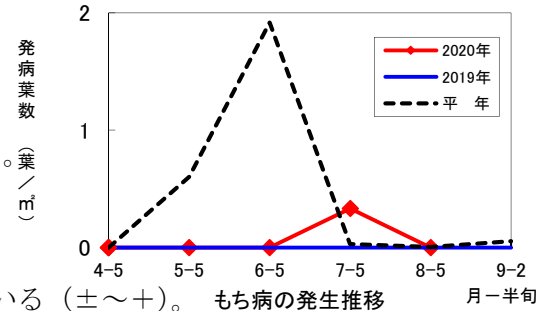
2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 発生葉数 0葉(平年 0.01葉、前年 0葉)
 発生ほ場率 0%(平年 0.6%、前年 0%)



イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上の注意

- ア 秋芽生育期に降雨が多いと、感染し、発病しやすくなる。
 イ 多発した園では、秋芽開葉期の防除を徹底する。

3 カンザワハダニ

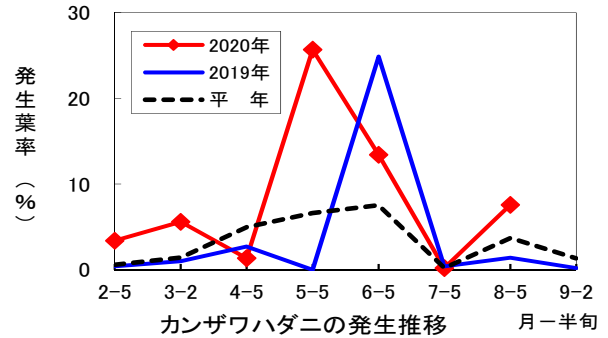
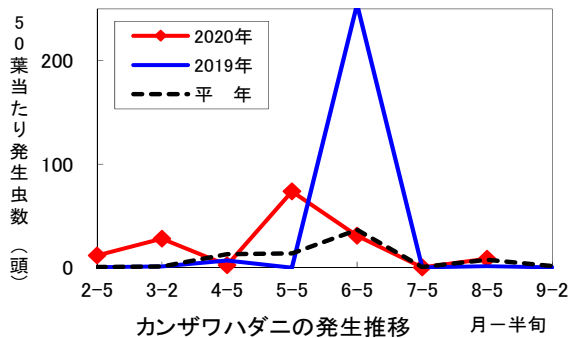
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 50葉当たり虫数 8.6頭(平年 7.4頭、前年 1.2頭)
 発生葉率 7.6%(平年 3.7%、前年 1.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の茶園では防除を行う。
 イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

1㎡当たり葉巻数 0葉(平年 0.4葉、前年 1.0葉)
 発生ほ場率 0%(平年 22.1%、前年 50.0%)

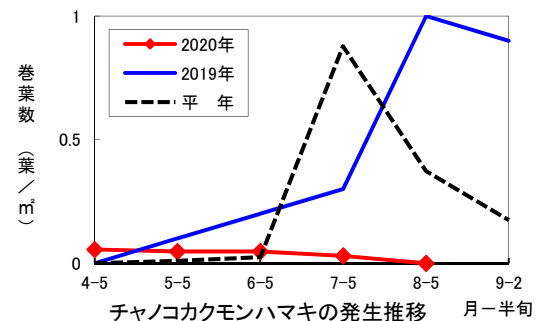
- イ 第2~3世代と考えられる7月1半旬~8月5半旬までのフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、平年並であった(±)。

誘殺数 <うきは市> 224頭(平年* 434頭、前年 637頭)

<八女市> 509頭(平年 434頭、前年 543頭)

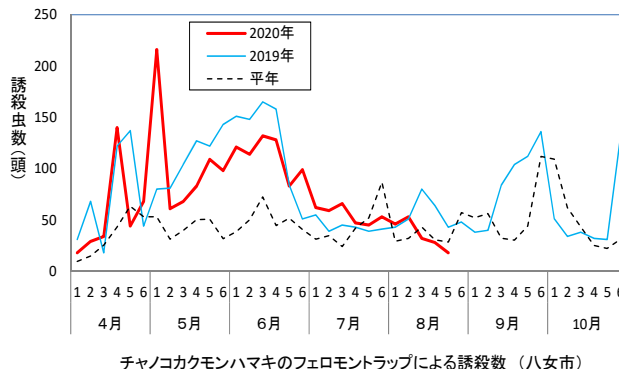
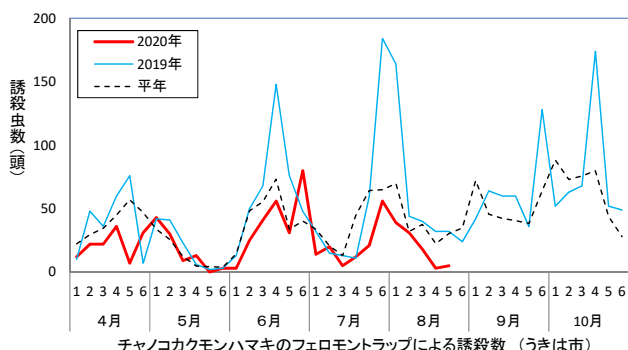
*うきは市の平年値は2016~19年の平均

- ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)



(3) 防除上の注意

- ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、8月下旬以降と予想されるので、ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-〜±）。

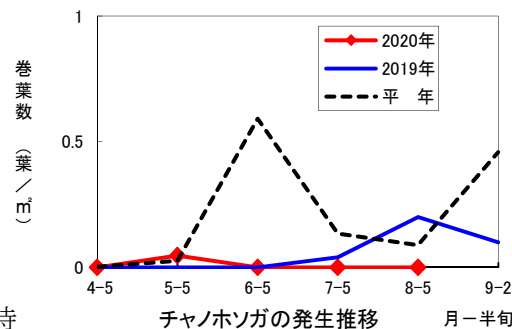
1㎡当たり葉巻数 0葉（平年 0.1葉、前年 0.2葉）
発生ほ場率 0%（平年 13.2%、前年 20.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）

(3) 防除上の注意

ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7〜10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年より多

(2) 予報の根拠

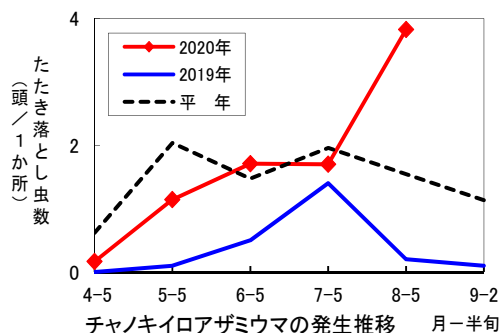
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±〜+）。

たたき落とし虫数 3.8頭（平年 1.5頭、前年 0.2頭）
発生ほ場率 80.0%（平年 61.4%、前年 30.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



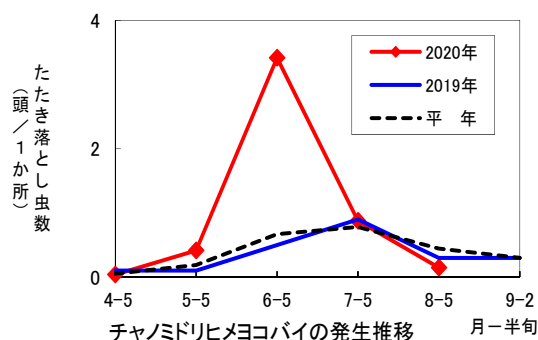
7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
たたき落とし虫数 0.2頭（平年 0.4頭、前年 0.3頭）



発生ほ場率 20.0% (平年 49.4%、前年 40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 二番茶期以降は成幼虫が混在するため、発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし方で、4頭以上見られる場合は防除を行う。

8 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

発生葉率 7.3% (平年 2.9%、前年 3.6%)

発生ほ場率 88.9% (平年 38.7%、前年 60.0%)

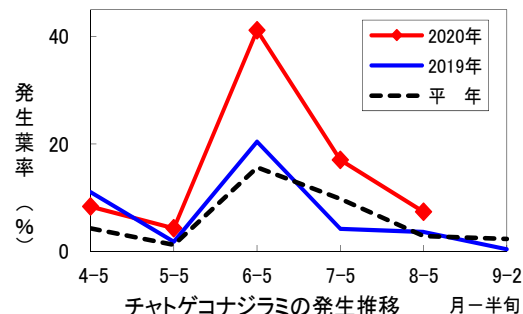
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は第3世代若齢幼虫発生期で、9月上~中旬と予想される。

成虫の発生状況をよく観察し発生がほとんど見られなくなった頃から、他の病害虫との防除を徹底する。

イ 幼虫は葉裏に発生しており発生の確認が困難である。農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。

携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



最新の病害虫発生状況